

資 料

自己開示動機に関する基礎的研究

小 口 孝 司*

A STUDY ON SELF-DISCLOSURE MOTIVES

Takashi OGUCHI

The present study is intended to investigate self-disclosure motives. First, classifications from self-disclosure of previous studies were checked and revealed that it was necessary to classify self-disclosure on the basis of motives. Second, items for identifying these motives were selected from the results of two pretests. In study 1, three self-disclosure motives, specifically, an 'intentional' motive, a 'normative' motive and an 'emotional' motive, were abstracted from their relations to situational factors that had been examined in previous studies. In study 2, the Self-disclosure Motives Inquiry (SMI) was invented from the findings of study 1. The self-disclosure motives measured by SMI were found to be significantly correlated to private and public self-consciousness. A need for the studies of self-disclosure from the viewpoint of motives has been discussed.

1. 問題の所在

社会心理学では、自分のことを他の人に話すことを自己開示 (self-disclosure) として捉えている。自己開示はコミュニケーションの最も基本的なものであり、同時に人間にとって必要不可欠な行為である。厳密な定義づけでは、自己開示は「特定の他者に対して伝達される自分自身に関する情報、およびその伝達行為」といえる (cf. Cozby, 1973; 安藤, 1986; 小口, 1987)。

自己開示研究にはいくつかの知見が得られてはいるものの、研究結果が一貫していないテーマも多い (cf. Chelune, 1979)。代表的な例として、男性と女性のどちらの方が自己開示が多いのかという問題をあげることができる。一般には女性の方が、男性に比べて、自己開示が多いとされている。しかし、Doster (1976) の研究では男性の方が女性よりも自己開示が多く、また Rosenfeld (1979) ではどちらの性の方が自己開示が多いのかの明確な結論を導くことができなかったと報告されている。

研究結果が一貫していない研究のもう一つの例としては、男性の自己開示に関するものをあげることができる。自分を魅力的だと思う男性の方がそうでない男性に比べて自己開示が多かったという研究 (Cash & Soloway, 1975) がある。一方、自己開示しない男性の方が自己開示する男性に比べて女性からの好意度が高かったという研究 (Chelune, 1976) がある。この2つの研究結果は明らかに矛盾している。

こうした非一貫性や矛盾の一つの原因として、自己開示には多くの側面があることを指摘できるであろう。言い換えると、研究者が研究対象とした自己開示の側面が異なっていたためではないかと思われる。しかし、研究者はこの自己開示の差異を従来の自己開示分類で捉えられなかったために、本来は異質な自己開示であるはずのものを同一の自己開示として扱い、結果に混乱をきたしたと考えられる。このため、以下では従来の自己開示の分類を概観し、そうした従来の分類では捉えられなかった側面を明らかにする新たな分類について考えていく

* 東京大学 (The University of Tokyo)

現所属: 日本労働研究機構 (The Japan Institute of Labour)

い。

従来の自己開示の分類としては、自己開示の内容による分類 (Jourard & Lasakow, 1958; Taylor & Altman, 1966; Morton, 1978)、自己開示の状況による分類 (Chelune, 1976)、自己開示の機能による分類 (Archer, 1983; 榎本, 1983; 安藤, 1986) などがある。こうした従来の分類はいずれもそれぞれに有効な方策であると思われる。

しかしながら、こうした分類では、先にあげた研究結果が一貫していない2つの例を端的に説明することはむづかしい。だが、自己開示の動機によって先に述べた2つの例を説明しようとする、矛盾した結果が簡単に説明できると思われる。例えば、ある動機が主な自己開示では、女性の方が男性に比べて自己開示が多いが、また別な動機が主な自己開示では、逆に男性の方が女性に比べて多くなることが考えられる。二番目の例の男性の自己開示に関する矛盾の場合は一層簡単に説明がつくであろう。つまり、男性が女性に気に入られようとして自己開示する動機と、男性が自分の悩みや不安を自己開示する動機とは大きく異なるはずである。したがって、単純な自己開示という指標では矛盾した結果になる場合でも、動機という観点を導入することにより説明が可能になると思われる。

動機という心理的メカニズムに基づいて、自己開示を分類しておくことには他の面でも有益であると思われる。なぜならば、動機のような心理的メカニズムを基にして、さまざまな自己開示の表現形態が見られるのであって、自己開示の個々の表現形態ばかりを追求しても、単なる情報の断片となってしまう恐れがあるからである。心理的メカニズムを同定した上で、顕在化している自己開示行動を分析していくことも生産的で意義あることと思われる。そうした結果として、より明確な自己開示の構造が明らかになり、さまざまな対人行動や内的属性との関連づけが精緻化されることが考えられる。以上述べてきた理由から、本研究は自己開示を動機に基づいて分類しようとするものである。

ところが、従来の自己開示研究では、自己開示動機を直接的に取り上げたものはない。しかし、自己開示動機に関連した研究として、なぜ人が自己開示をするのかに関して説明原理を示しているいくつかの研究をあげることができる。そうした研究は、今までのところ、報酬と損失、好意と魅力、帰属などの中で検討されてきた。こうした説明原理の3つについて代表的な研究をあげてみる。報酬と損失の観点からは、Taylor (1968) による自己開示が交わされ続けるのは何らかの報酬があるか

らだとする研究があげられよう。この場合、報酬とは好意、魅力、合意などの肯定的な体験を指し、損失とは嫌悪、不一致、緊張などの否定的な体験を指す。好意と魅力の観点からは、Worthy, Gary, & Kahn (1969) などが、自己開示は好意を生じさせ、好意は自己開示を生じさせるという自己開示—好意仮説を提出している。帰属の観点からは、Jones & Archer (1976) や中村(1984) などが、自己開示の個人差 (personalism) (聞き手が自分だけになされた自己開示を受けた場合はその開示者に対して好意が増すという効果) を示している。

こうした研究は、それぞれに自己開示研究の拡大に寄与しているばかりではなく、自己開示の動機探求のための有効な示唆を与えている。しかしながら、それらは自己開示の動機自体を研究の対象としたものではないので、自己開示の動機自体を明らかにしていないといえよう。そこで、本研究ではまず一般的な自己開示動機の探求から始めていきたい。

2. 予備調査

目 的

自己開示動機として、どのようなものが指定できるかについて、これを予備調査で調べる。

方 法

自由回答式で自己開示の開示動機を収集した。自由回答式の質問用紙調査という形態で、男性8名、女性6名の合せて14名を対象とし、「人はなぜ自分のことを、他の人に話すのだと思いますか。また人はなぜ自分のことを、他の人に話さないのだと思いますか。」という質問項目に回答を求めた。被調査者の年齢は20歳から35歳までであった。さらに、心理学の一般教養を選択している、大学1年次生、男子36名、女子40名の計76名を対象として、先の質問と同様の自由回答式の質問紙調査という形態で、「人はなぜ自分のことを、他の人に話すのだと思いますか。また人はなぜ自分のことを、他の人に話さないのだと思いますか。」という質問項目に回答を求めた。

結果と考察

結果、64項目が自己開示動機としてあがった。2つの予備調査から得られた64の自己開示動機を意味の近いものなどを集めて、21項目の自己開示動機に絞り、これを以下で述べる最終的な動機の構造を同定するための研究1の基礎資料とした。これを表1に示す。なお「人はなぜ自分のことを、他の人に話さないのだと思いますか。」という自己開示の回避の動機についても予備調査で回答を求めたが、被調査者が回答するには困難であることが示されたので、今回の研究の対象から外した。

表 1 自己開示動機項目の回転後の因子負荷量

自己開示動機項目	因 子			h ²
	意図	感情	規範	
(意図性の動機)				
1. 自分の気持ちを分かってもらいたいため	.77			.81
4. 相手からの評価を得るため	.85			.92
5. 人と同じであること、違うことを示すため	.88			.90
6. 自分のイメージを変えたり、保ったりするため	.83			.76
7. 相手からアドバイスを受けるため	.76			.81
8. 自分の考え方や感じ方をハッキリさせるため	.79			.85
10. 相手に自分を知って欲しいため	.88			.87
13. 相手あるいは自分に利益があるため	.87			.79
14. 相手を快くしたり、不快にしたりするため	.46			.29
18. 相手が自分と係わりがあるため	.54			.58
(感情性の動機)				
3. 自分の中にしまっておきたくないため		.79		.85
19. 気分が高まって（落ち込んで）いるため		.92		.92
20. 誤って口にしてしまったため		.86		.76
(規範性の動機)				
15. その場の雰囲気に合わせてるため			.83	.70
16. 相手が本人のことを話したため			.91	.88
17. 礼儀であるため			.82	.87
21. 話題が他にないため			.72	.71
(意図性と規範性の動機)				
11. 相手が自分に好感を持つようになるため	.78		.52	.88
12. 相手との親密な人間関係を作るため	.61		.57	.91
(意図性と感情性の動機)				
2. 自分の気分がよくなるため	.51	.72		.78
9. 自分を変えるため	.75	.51		.85
固有値	10.53	3.91	2.24	
寄与率（%）	50.15	18.63	10.66	

3. 研究 1 自己開示動機の種類

目 的

ここでは自己開示動機の種類をおこない、さらに自己開示の各動機の性格を状況要因との関連で明らかにしていく。ここで、状況という用語を、場面や設定という意味以外にも、そこで交わされる話題や開示の望ましさ等を含んだより広い概念として捉えていく。

方 法

被調査者：大学の一般教養の心理学を受講している、主に1, 2年次生、男子31名、女子40名、計71名を対象とした。この内、有効な被調査者の数は男子26名、女子34名、計60名であった。有効回答数が少ないのは、回答に不備があったためと、2人で1組の評定となるが組と

ならなかったものがあつたためである。

得点化：被調査者に、予備研究の結果から得られた21の自己開示動機が22の状況で、どの程度該当するかを評定させた。「非常に当てはまる」5点から「全く当てはまらない」1点までの5件法で評定させた。この得点を用いて以下の分析を行った。この方法では、462対の該当度を尋ねるというものであり、被調査者への負担が大きいと思われたので、2人の評定をもって1組の評定が完成するようにした。自己開示はそもそもさまざまな状況、相手、内容によりその動機が規定されるものと考えられるため、その様な要因との共変を調べるためである。すなわち、逆にどういった要因の時に、どの様な動機が働きやすいかを調べられるためでもある。なお、開示動機項目と掛け合わされた諸条件は、以下の通りである（各

表 2 情況要因の回転後の因子負荷量

情況番号	一般的因子	新奇的因子	h^2
1	.96		.93
2	.77		.78
3	.85		.73
4	.45		.22
5	.94		.88
6	.79		.67
7	.96		.91
8	.94		.89
10	.92		.93
12	.70		.53
13	.86		.89
15	.81		.66
16	.95		.94
18	.59		.37
19	.79		.69
20	.78		.70
21	.91		.83
9		.93	.87
11		.71	.89
14		.88	.79
17		.93	.88
22		.84	.72
固有値	13.02	3.67	
寄与率 (%)	59.18	16.68	

情況の後の数字は、表 2 の情況番号に対応している)。

話題：自己開示質問紙の最も典型的なものとされる JSDQ (Jourard & Lasakow, 1958) で挙げられていた自己開示の 6 領域を取り上げた。すなわち、開示の話題が、意見や態度(1)、越味や関心(2)、仕事や勉強(3)、金銭(4)、パーソナリティ(5)、身体や外観(6)の以上 6 領域である。この 6 領域を開示内容としたときの開示の動機としての該当度を求めた。

情況：自己開示質問紙に情況要因を考慮すべきだとし創案された SDSS (Chelune, 1976) の中の項目を 4 つ選定した。この SDSS は、開示状況を、相手が一人か多数かの開示人数の条件、また相手がよく知った人物かあるいは未知の人物かの既知性の条件、以上の 2 条件を掛け合わせて 4 つの基本的枠組みを作製する。さらに、この枠組みごとに開示のしやすさで 5 段階を設け、計 20 の場面でのどの程度自己開示をするのかを直接的に聞くものである。この SDSS を翻訳し、実際に日本で試行してみた結果に基づいて、各条件ごとに最も開示しやすい

情況から一つ、最も開示し難い情況からの、計 2 つを各々の条件から選び出し、全体で 8 つに絞り、情況とした。具体的に選定した項目は以下の通りである。熟知者条件で対象が一人の場合。親密度が低い情況として、一人の友人と図書館にるとき(7)。親密度が高い条件として、友達と 2 人で一週間のドライブ旅行をしているとき(8)。熟知者条件で対象が複数の場合。親密度が低い情況として、家族を夕食を共にしているとき(9)。親密度が高い情況として、喫茶店でゼミの友人たちといるとき(10)。未知者条件で対象が一人の場合。親密度が低い条件として、一人旅で偶然知り合った人といるとき(11)。親密度が高い情況として、就職相談所で、職を探しているとき(12)。未知者条件で対象が多数の場合。親密度が低い条件として、見知らぬ人たちに紹介されているとき(13)。親密度が高い条件として、討論会の討論者でいるとき(14)。

さらに、小口(1986)が作製した自己開示質問紙 JIS からは、SDSS に類似した開示対象によって分けられた情況を 5 つ設定した。一つが熟知者で一人の場合。これは親友(15)と恋人(16)の場合の 2 つを想定した。両者とも一人でかつ熟知者であることには違いはないが、その意味合いにおいては大きな差異が存在するものとして、今回は敢えて 2 つ選択した。次に、開示者が熟知者であり、かつ多数である場合で、直接的に対象が 2, 3 人の友人である場合を想定した(17)。さらに、開示者が 1 人で、かつ未知者である場合で、旅行中たまたま列車に乗り合わせた人である場合(18)。最後が、未知者で、かつ多数である場合で、新しいバイト先で一緒に働いている人たちであるときを想定した(19)。以上の開示情況 5 つを設定した。

開示の望ましき：JIS からはこの他に、開示の質、開示の望ましきを考慮すべきことが示されたので、直接的であるが、自己開示が自分にとって良い面であるとき(20)、悪い面であるとき(21)、自分への評価には余り関係のないものであるとき(22)、の 3 つの場合を加えた。

以上、JSDQ からは 6 場面、SDSS からは 4 場面、JIS からは 8 場面の計 22 場面を開示情況として、自己開示の動機の種類に用いる情況とした。

結果と考察

動機項目の分類：21 の自己開示動機が 22 の情況でどの程度該当するかを評定させた値の平均値を算出し、21*22 のマトリックスを得た。このマトリックスから、自己開示動機について因子分析を行った。得られたデータを用いて、主成分分析の後、バリマックス回転させた。結果を表 1 に示す。抽出された因子は 3 因子あり、第一因子

を「意図」因子、第二因子を「規範」因子、第三因子を「感情」因子と命名した。

「意図」因子は、他者との関係を調節していくためのものと見なせる。他者との比較を通して自分の位置づけを行い、他者との関係の調節を意図して行い、その背景として自他の利害も含まれるという一連の行為の動機として「意図」因子を位置づけることができる。従来の自己開示研究ではこの「意図」因子は実験場面ではあまり検討されていないが、実験協力者との将来に渡る相互作用を予期させた場合 (Shaffer & Ogden, 1986) や取り入り (ingratiation) に関連した自己開示研究など高地位者への開示を目的とした実験 (Schneider & Eustis, 1972) での自己開示は、この「意図」因子に近いものであると考えられる。

「感情」因子は、自分の感情の抑揚によって自己開示をしてしまうものと考えられる。「感情」因子に関しては Jourard (1971) も自己開示の重要な問題の1つとして言及している。彼によると、男性は感情的な表出が抑制されているので、これが致命的な精神的負荷となって、女性に比べて寿命が短くなるという事態まで引き起こしているという。この「感情」因子は「意図」因子以上に従来の研究の中では扱われていないと思われる。数少ない例としては、夫婦間での結婚の満足度は嬉しい出来事を開示しあう量に比例するという研究 (Hendrick, 1981) などが挙げられよう。

「規範」因子は、自己を取り巻く状況や規範などによって、自己開示をする自己開示動機であると考えられる。この「規範」因子が従来実験で対象とされることが一番多く、一般的に自己開示とされるものであったといえよう。ほとんどの自己開示研究がこの「規範」因子に該当するので、「規範」因子に関する具体的な研究への言及は差し控えておく。実験への参加を依頼されて行う自己開示の動機としては「規範」因子が最も一般的であろう。さらには数少ない自己開示の現場実験でもこうした傾向は同様である。例としては、Rubin (1973) が空港のロビーで行った自己開示の相互性に関するものなどが挙げられるであろう。見知らぬ人 (実験協力者) から突然自己開示をされたとき、それに応じて自己開示をする理由としては、「規範」因子が最も一般的だと思われる。このように各自己開示動機に基づく自己開示を考えると、従来の研究で対象としていた自己開示の偏りが明らかとなる。またこれは自己開示研究における一貫しない結果を解決するための示唆を与えていると思われる。

状況要因の分類：本研究で用いた22の状況の因子分析を実施して、この状況因子と動機因子との関連を探索た

表 3 自己開示動機、状況ごとの自己開示量 (全体)

情 況	自己開示動機		
	意図性	規範性	感情性
一般的因子	3.18	4.38	-0.05
新奇的因子	1.46	2.62	-0.40

(男子)

情 況	自己開示動機		
	意図性	規範性	感情性
一般的因子	2.74	4.15	-0.16
新奇的因子	2.45	2.45	-0.41

(女子)

情 況	自己開示動機		
	意図性	規範性	感情性
一般的因子	3.52	4.55	0.04
新奇的因子	1.29	2.75	-0.40

めの前段階とした。先の21*22のマトリックスを、今度は状況要因に関して因子分析を実施し、状況因子を抽出した。主成分分析し、バリマックス回転させた因子分析の結果、2因子を抽出し、第一因子を「一般的情况」因子、第二因子を「新奇的情况」因子と名づけた。表2に示す。なお状況番号は方法で述べた状況に対応する。

自己開示動機と状況要因との関連：自己開示量について状況 (一般的情况、新奇的情况) と開示動機 (意図、規範、感情) の分散分析を行なった。因子分析によりそれぞれの得点を得た。その結果を被調査者全体と男女で表3に示す。自己開示動機と状況要因とに主効果が見られ (それぞれ $F=38.82, p<.001$; $F=99.86, p<.001$), Duncan の多重範囲検定でも自己開示動機の3つがそれぞれ独立であることがわかった (規範性3.30; 意図性2.21; 感情性-0.28)。つまり、3つの自己開示動機、2つの状況要因のそれぞれは異なったものであることが示された。これは男女差がなく、一般に認められた。また交互作用もあった ($F=4.39, p<.02$)。しかし交互作用に関しては、性差が見られた。すなわち、男子では自己開示動機と状況要因に交互作用が見られなかったが ($F=1.12, n.s.$), 女子では交互作用が見られた ($F=4.76, p<.02$)。女子の場合、「意図」因子が他の2つに比べて、一般的情况因子よりも新奇的情况因子でその該当度が下がっていた。つまり、女子は新奇情

況では、一般的な情況に比べて「意図」因子の自己開示を行うことが少ないと言えた。これは自己開示研究における性差理解のために、自己開示動機を考慮する事が有効であることを示唆しているものと思われる。さらにこれは自己開示を考える際に開示動機を考慮していかなければならない証左となっているといえよう。

原因帰属の側面から3つの動機を捉えたと、自己開示の原因帰属を自己の内に求めるのが「感情」因子、自己と他者との関係性、相互作用に原因を求めるのが「意図」因子、そして場面的要請や社会的慣習といった情況に求めるのが「規範」因子と言えよう。言い換えると、内的帰属が一番高いのは「感情」因子であり、外的帰属が一番高いのは「規範」因子で、その中間に「意図」因子が位置づけられると思われる。自己開示動機を情況要因の2次元上に位置づけた場合、情況からの説明される率が高いのは「規範」因子、「意図」因子、「感情」因子の順であり、これは上述した考えを支持するものであると思われる。

4. 研究2 自己開示動機質問紙の検討

目 的

ここでは、研究1の自己開示動機の種類に基づき、個人の自己開示動機傾向を測定する自己開示動機質問紙を作成し、その質問紙と性格検査との関連を検討していく。その際の目的は、以下の2つに大別されるであろう。自己開示の動機質問紙の作製（目的1）、自己開示の各動機の性格を明らかにすること（目的2）である。ここで、目的1については、既にその結果を報告したので（小口、1989b）、以下の方法・結果・考察では言及しない。そこで、目的1の結果について簡単に記しておく（具体的な数値等については先の研究を参照されたい）。

従来、自己開示の動機質問紙と呼べるものはなかったもので、新たに作製する必要があった。自己開示動機質問紙は、研究1で同定された自己開示動機項目中、「意図」因子、「規範」因子、「感情」因子、それぞれ因子負荷量が0.7、0.6、0.6以上のものを以て各動機を表す質問項目とし、それぞれ意図性、規範性、感情性とした。各動機の具体的項目は、意図性が「相手からの評価を得るため」「人と同じであること（違うこと）を示すため」「自分のイメージを変えたり（保ったり）するため」「相手に自分を知って欲しいため」「相手あるいは自分に利益があるため」の5項目。規範性は「その場の雰囲気に合わせてため」「相手が本人のことを話したため」「礼儀であるため」「話題が他にないため」の4項目。感情性は「自分の中にしまっておきたくないため」「気分が高まって（落ち

込んで）いるため」「誤って口にしてしまったため」の3項目である。この自己開示動機質問紙は、Self-disclosure Motives Inquiry の頭文字を取って、SMI と名づけた。各動機得点は次のように算出した。SMI は各動機の個人差を測定することがその主眼であるので、個人における自己開示の各動機の比率をもって動機得点とした。つまり、各動機ごとに項目の平均点を算出し、その和をもって個人の自己開示の動機傾向性の総得点とした。この自己開示の動機傾向性の総得点を分母とし、各動機の平均値を分子としたものを各動機の個人得点とした。以下ではこの SMI とパーソナリティ・スケールとの関連を探っていくことにする。

方 法

自己開示動機質問紙を用いて、自己開示の各動機の性格づけを、関連があると思われる性格特性などとの関係から検討する。各動機の性格を明らかにするのに適したパーソナリティ変数として、自己意識（self-consciousness; Fenigstein, Scheier, & Buss, 1975）、セルフ・モニタリング（Self-monitoring; Snyder, 1974）を取り上げた。これらのパーソナリティ変数は現在の社会心理学の中で広く用いられており、かつ今回作成する自己開示動機質問紙の性格を捉えるのに適していると考えられたので用いた。

セルフ・モニタリングスケール：Snyder（1974）が作成した尺度を、岩淵・田中・中里（1982）が邦訳したものをを用いた。セルフ・モニタリングとは、状況や他者の行動に基づいて、自己の表出行動や自己提示が社会的に適切なのかを観察し、自己の行動を統制することである。「人の行動をまねるのは苦手だ」というような25項目ごとに、1点（まったく当てはまらない）から5点（非常に当てはまる）まで5段階で評定させる。このようにして算出された得点を総計して、セルフ・モニタリング得点とする。高得点ほどセルフ・モニタリング傾向が高い。

自己意識尺度：Fenigstein, Scheier, & Buss（1975）が作成し、これを押見・渡辺・石川（1979）が邦訳したものをを用いた。自己意識特性とは自分自身に注意を向けやすく、自分を意識しやすい性格特性のことであり、私的自己意識（private self-consciousness）、公的自己意識（public self-consciousness）、社会的不安（social anxiety）の3つからなる。私的自己意識は自己の感情、動機、思考といった内面に注意を向けやすい性格特性のことであり、公的自己意識は社会的対象としての自己に注意を向けやすい性格特性、社会的不安は対人場面での不安傾向を指す。私的自己意識は9項目、公的自己意識は9項目、社会的不安は7項目から成る。これらの項目に

対して、どのくらい被験者が該当するのかを5件法で答えさせる。各特性とも項目の合計点をもって当該特性の得点とする。本研究では、公的自己意識、私的自己意識を分析の対象とした。

被調査者と手続き：被調査者は大学生の男女170名を対象とした。この内、有効回答をした組、男子92名、女子60名、計152名を分析の対象とした。大学の心理学の講義の時間中に集団実施した。被調査者は自己開示動機質問紙 SMI とセルフ・モニタリングスケール、自己意識尺度に回答した。

結 果

自己開示の各動機とパーソナリティ特性と関連：自己開示の各動機とセルフ・モニタリングスケール、自己意識尺度との相関係数を表4に示す。各動機で分析単位ごとに結果を述べていく。意図性に関して、被調査者全体では、意図性については公的自己意識と私的自己意識とに有意な正の相関が見られた。同様の傾向が男性の場合にも該当した（それぞれ $r = .318$, $p < .05$; $r = .380$, $p < .001$ ）。しかし、女性の場合には意図性と公的自己意識との間に有意な正の相関が見られたが（ $r = .319$, $p < 0.5$ ）、意図性と私的自己意識とには有意な相関が認められなかった（ $r = .130$, $n. s.$ ）。規範性では、被調査者全体と男性被調査者とが同じ傾向を示した。すなわち男性の場合、公的自己意識と私的自己意識とに有意な負の相関（それぞれ $r = -.210$, $p < .50$; $r = -.318$, $p < .05$ ）、が見られた。女性の場合は公的自己意識とに有意な負の相関が見られたが（ $r = -.500$, $p < .01$ ）、私的自己意識とには有意な相関はみられなかった（ $r = -.148$, $n. s.$ ）。またセルフ・モニタリングは男性の規範性のみと有意な相関が見られる（ $r = -.305$, $p < .05$ ）にとどまった。

考 察

各動機の性格が明らかとなった。意図性は自己意識と関わることがわかった。有意な相関が見られた結果についてそれぞれ考察していく。

意図性と公的自己意識：公的自己意識の高い人は、低い人に比べて、規範的影響による同調行動を強く示すという研究がある（Formming & Carver, 1981；石川・渡辺・押見, 1984）。規範的同調行動というのは、他者に自分の良い面を認めてもらいたいという意図を持った行動であるといえる。そこで、公的な自己意識が高い人は、自己開示においてそのような意図性が高かったのであろう。

意図性と私的自己意識：私的自己意識が高い人は出来事の原因帰属において自己帰属の割合が高いとされてい

表 4 自己開示動機とパーソナリティ・スケールとの相関

パーソナリティ・ スケール	自己開示動機		
	意図性	感情性	規範性
セルフ・モニタリング	.052	.059	-.119
公的自己意識	.335**	-.021	-.299**
私的自己意識	.284*	-.039	-.228*

* : $p < .05$ ** : $p < .001$

(N = 76)

る（Buss & Scheier, 1976）。意図的な自己開示には、自分を知りたいため、自分の行為、行動の妥当性を得たいためにするというものも含まれる。私的自己意識が高い人は、こうした目的をもってなす意図性が高かったのであろう。

規範性と公的自己意識：公的自己意識の高い人は他者の示す拒絶反応に敏感である（Fenigstein, 1979）。つまり他者からの肯定的な評価を得ようとする意図性の動機とは異なり、「仕方なく開示する」という意味合の強い規範性が高い人は、公的自己意識が低かったのであろう。

規範性と公的自己意識：私的自己意識の高い人は、信念、態度と一貫した公的行動を示すという（Scheier, Buss, & Buss, 1978；Scheier, 1980）。この逆を考えると、こうした側面を持つ私的自己意識の高い人は規範的、場面要請的な開示をする規範性が低いことが予測される。つまり、規範性と私的自己意識とは負の相関を示したのである。

なお全体でも男女でもほぼ同じ傾向にあったが、女性では意図性と規範性ともに私的自己意識が関連しなかった。これは女性の場合、意図性は相手からの好意を得ることに主眼があることに起因しているのではないかと思われる。つまり女性が意図性の自己開示をする場合、他者の好意を得るためなどの意図によるが、社会的比較により自己属性の妥当性を確かめたり、社会的真实性を確かめるといった意図はあまりないのではないかと思われる。同様に女性は、社会的な妥当性を求めるとかの要求自体が高くないので、こうした傾向とは反する規範的な開示とも関連がなかったものと思われる。かくして女性の場合、意図性と規範性が私的自己意識に関連しなかったと考えられよう。

また自己開示動機とセルフ・モニタリングとの結果については一層の検討が要されるであろう。

5. 全体考察

本研究から得られた結果をまとめてみる。研究1では、自己開示動機として、「意図」因子、「規範」因子、「感情」

因子の3つが得られた。この3つの動機は、内容的に相互に独立なものであり、自己開示動機の諸側面を捉えていることが過去の研究の知見との関連から示された。さらに、帰属の観点から、外的な状況要因に帰属されるのは、「感情」因子、「意図」因子、「規範」因子の順で高いことが示された。

また研究2では、研究1の結果から自己開示動機の個人差を測定する質問紙 (SMI) を作成し、その得点を「感情」因子、「意図」因子、「規範」因子に対応するものとして、感情性、意図性、規範性と名づけた。この質問紙と他の性格検査との関連を探った。自己開示動機質問紙は信頼できるものであることが示された。また各動機は性格検査との関連では異なった様相を呈しており、ここでも自己開示動機が相互に独立した性格を有していることが示された。

この3つの自己開示動機は、交流分析等で言及されているいわゆる3つの自我の部分に対応するのではないと思われる。自我の部分とは、親の部分(超自我)P、大人の部分(自我)A、子供の部分(エス)Cのそれぞれが、自己開示の動機の種類ではPが規範性に、Aが意図性に、Cが感情性に相当するものと類推される。こうした対応はたして現実に見られるか否かは明らかではないが、自己開示動機の3分類が臨床心理学の分野と共通する可能性を持っていることは否定できないと思われる。有益な検討課題であると思われる。

以上、自己開示動機自体について検討してきたが、次にこうした開示動機を自己開示研究に用いることの有効性についてふれてみたい。その際、自己開示動機を独立変数とした場合と、従属変数とした場合とに分けて以下に記していく。

独立変数とした場合。個人をその個人の最も優勢な動機に基づいて分類したとき、感情性が優勢な個人は、意図性が優勢な個人に比べ、友人から受けるパーソナリティ判断と自分で評定した自らのパーソナリティ判断との一致度が小さかった(小口, 1989b)。また意図性が優勢な個人は、感情性、規範性が優勢な個人に比べ、他者から自己開示を受けることが多かった(小口, 1989a)。ここから感情性が最も優勢な人と意図性が最も優勢な人との違いが明瞭に表されていると思われる。つまり自己開示動機が特性要因として、有効な要因であることが示唆されるといえる。

次に、従属変数とした場合。集団内地位が高い個人は、地位が低い個人に比べ、その集団に新たに加わるメンバーの自己開示を、より規範性に基づくものとみなしていた(小口, 1990a)。また親密度が低い同性の友人から、

親密度が高い友人になるにつれて、その友人への自己開示動機として、規範性が減少していき、逆に感情性が増加していくことが示された(小口, 1990b)。ここから、対人行動を研究する際に、各自己開示動機が有効なものであることが示唆されているといえる。

さらに、問題の所在でも述べたように、従来実験室で扱われてきた自己開示の動機を同定することにより、不一致であった研究結果を統一的に了解することができると思われる。先にも述べたように、自己開示が少ない男性の方が、自己開示が多い男性に比べて、より好ましいと評定されたという研究(Chelune, 1976)がある。一方、身体的魅力度に関して自分を魅力的だと思っている男性ほど自己開示が多い(Cash & Soloway, 1975)という研究もある。一見すると、矛盾する結論である。しかし、こうした結果を統一的に理解するには、自己開示動機に沿って各々の自己開示を分類、同定すると矛盾しない結果になると思われる。すなわち、おのおのの自己開示で知覚された動機を推定すると、前者の場合は規範的な自己開示が要請される場面、設定であった。このため男性は性役割のステレオタイプに沿った形での自己開示、あるいは相互作用が浅い者の間で当然とされる自己開示が要請されていたと思われる。一方、後者は他者に対して積極的に働きかけていく事が望ましいとされる場面、ないしは設定であった。このため男性は積極的に他者に対して働きかけていき、その自己開示動機は意図性が該当したのだと考えられる。ここから、同じ自己開示であっても、その動機によって分類すると、一見矛盾した結果も説明できるようになると思われる。

今後の課題としては、援助行動の動機と機能について言及している高木(1982/1983)のように、自己開示動機の機能的側面(安藤, 1986)などとの関連を探っていく必要もあろう。そうしたことからより明確に自己開示を捉えていくことができるであろう。さらには、困難な課題ではあるが、なぜ自己開示しないのかの動機、さらには自己開示の生起メカニズムにまで言及していくことも必要であろう。またコミュニケーション行動全体に対して、こうした3つの動機の概念を拡張して援用することもあるのか、なども探求されていかねばならないだろう。開示動機自体についても、大学生以外のサンプルを用いるなどの一般化も待たれる。

このような課題も残されているが、自己開示動機は自己開示研究において有効であり、今後一層の検討を重ねながら、活用されていくべきものであると思われる。

〔付記〕

本論文の作成に当たり、御指導、御教示を賜りました古畑和孝教授（東京大学）、押見輝男教授（立教大学）、安藤清志助教授（東京女子大学）に厚く感謝いたします。またデータの分析に際して、坂元章さん（東京大学大学院社会学研究科）のご協力を得ました。記して感謝いたします。

尚、本論文は、東京大学大学院社会学研究科に修士論文として提出したものの一部に加筆したものである。

文 献

- 1) 安藤清志：対人関係における自己開示の機能。東京女子大学紀要「論集」，1986，**36**，167-199。
- 2) Archer, R. L. & Earle, W. B. : The interpersonal orientations of disclosure. In P. B. Paulus (Ed.), *Basic group process*. New York, Springer-Verlag, 1983, Pp. 289-314.
- 3) Buss, D. M. & Scheier, M. F. : Self-consciousness, self-awareness, and self-attribution. *Journal of Research in Personality*, 1976, **10**, 465-468.
- 4) Cash, T. F. & Soloway, D. : Self-disclosure correlates of physical attractiveness: An exploratory study. *Psychological Reports*, 1975, **36**, 579-586.
- 5) Chelune, G. J. : Self-disclosure situations survey: A new approach to measuring self-disclosure. *Catalog of Selected Documents in Psychology*, 1976, **6**, 111.
- 6) Chelune, G. J. Measuring openness in interpersonal communication. In G. J. Chelune and associates, *Self-disclosure*. San Francisco, Jossey-Bass, Pp. 1-27, 1979.
- 7) Cozby, P. C. : Self-disclosure: A literature review. *Psychological Bulletin*, 1973, **79**, 73-91.
- 8) Doster, J. A. : Sex role learning and interview communication. *Journal of Counseling Psychology*, 1976, **23**, 482-485.
- 9) 榎本博明：青年の自己開示。金子書房，青年心理，1983，**37**，Pp. 141-147.
- 10) Fenigstein, A. : Self-consciousness, self-attention, and social interaction. *Journal of Personality and Social Psychology*, 1979, **37** : 75-86.
- 11) Fenigstein, A., Scheier, M. F. & Bass, A. H. : Public and private self-consciousness: Assessment and theory. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 1975, **43**, 522-523.
- 12) Fromming, W. J. & Carver, C. S. : Divergent influences of private and public self-consciousness in a compliance paradigm. *Journal of Research in Personality*, 1981, **15**, 159-171.
- 13) Hendrick, S. S. : Self-disclosure and marital satisfaction. *Journal of Personality and Social Psychology*, 1981, **40**, 1150-1159.
- 14) 石川直弘，渡辺浪二，押見輝男：同調行動に及ぼす自己意識特性の効果。日本心理学会第48回大会発表論文集，707，1984。
- 15) 岩淵千明，田中国夫，中里浩明：セルフ・モニタリング尺度に関する研究。心理学研究，1982，**53**，54-57。
- 16) Jones, E. E. & Archer, R. L. : Are there special effects of personalistic self-disclosure? *Journal of Experimental Social Psychology*, 1976, **12**, 180-193.
- 17) Jourard, S. M. : *The Transparent Self* (Rev. ed.) New York, Van Nostrand Reinhold, 1971. (岡堂哲雄(訳)，1974，透明なる自己，誠信書房)
- 18) Jourard, S. M. & Lasakow, P. : Some factors in self-disclosure. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 1958, **56**, 91-98.
- 19) Morton, T. L. : Intimacy and reciprocity of exchange: A comparison of spouses and strangers. *Journal of Personality and Social Psychology*, 1978, **36**, 72-91.
- 20) 中村雅彦：自己開示の対人魅力に及ぼす効果。心理学研究，1984，**55**，131-137。
- 21) 小口孝司：自己開示の個人差に関する一研究—JIS の作成と適用—。日本心理学会第50回大会発表論文集，681，1986。
- 22) 小口孝司：自己開示の動機に関する研究。東京大学大学院社会学研究科修士論文（未公刊），1987。
- 23) 小口孝司：自己開示の受け手に関する研究—オープン・スケール，(R-JSDQ) と (SMI) を用いて—。応用社会学研究（立教大学社会学部紀要），1989 a，**31**，49-64。
- 24) 小口孝司：開示者のパーソナリティについての本人・受け手による判断の一致度と自己開示動機との関係について。心理学研究，1989 b，**60**，224-230。
- 25) 小口孝司：聞き手の集団内地位が開示動機の推定に及ぼす効果。実験社会心理学研究(印刷中)，1990 a。
- 26) 小口孝司：対人関係の深さと自己開示(未公刊)，1990 b。
- 27) 押見輝男，渡辺浪二，石川直弘：自己意識尺度の検討。立教大学心理学研究年報，1986，**28**，1-10。
- 28) Rubin, Z. : Disclosing oneself to a stranger: reciprocity and its limits. *Journal of Experimental Social Psychology*, 1973, **11**, 233-260.
- 29) Rosenfeld, L. B. : Self-disclosure avoidance: Why I am afraid to tell you who I am. *Communication Monographs*, 1979, **46**, 63-

- 74.
- 30) Schneider, D. J. & Eustis, A. G. : Effect of ingratiation motivation, target positiveness, and revealingness on self-presentation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 1972, **22**, 149-155.
- 31) Scheier, M. F. : Effects of public and private self-consciousness on the public expression of personal beliefs. *Journal of Personality and Social Psychology*, 1980, **39**, 514-521.
- 32) Scheier, M. F., Buss, A. H. & Buss, D. M. : Self-consciousness, self-report of aggressiveness, and aggression. *Journal of Research in Personality*, 1978, **12**, 133-140.
- 33) Shaffer, D. R. & Ogden, J. K. : On sex differences in self-disclosure during acquaintance process : The role of anticipated future interaction. *Journal of Personality and Social Psychology*, 1986, **51**, 92-101.
- 34) Snyder, M. : Self-monitoring of expressive behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 1974, **30**, 526-537.
- 35) 高木 修 : 順社会行動のクラスターと行動特性. 年報社会心理学, 1982, **23**, 137-156.
- 36) 高木 修 : 順社会的行動の構造. 年報社会心理学, 1983, **24**, 187-207.
- 37) Taylor, D. A. : The development of interpersonal relationships : Social penetration processes. *Journal of Social Psychology*, 1968, **75**, 79-90.
- 38) Taylor, D. A. & Altman, I. : Intimacy-scaled stimuli for use in studies of interpersonal relations. *Psychological Reports*, 1966, **19**, 729-730.
- 39) Worthy, M., Gary, A. L. & Kahn, G. M. : Self-disclosure as an exchange process. *Journal of Personality and Social Psychology*, 1969, **13**, 59-63.
-